卒業論文

指導教官・新井政美教官

ケマル・パシャの人物像

― 女性関係から見たケマル・パシャ ―

学籍番号 8598072

南・西アジア課程トルコ語専攻

室 和憲

＜卒業論文目次＞

序章（P.2）

第 1 節　はじめに

第 2 節　問題提起及び本稿の目標

第 1 章　ムスタファ・ケマル・アタチュルクの生涯（P.4）

第 1 節　生誕、軍人へ

第 2 節　第 1 次世界大戦

第 3 節　祖国解放戦争

第 4 節　近代化の第一歩

第 5 節　本格的な改革、そして死

第 2 章　ムスタファ・ケマル・アタチュルクの女性関係―ラティフェ・ハヌンを中心に（P.9）

第 1 節　ラティフェ・ハヌンという女性

第 2 節　ラティフェ・ハヌンとの出会い

第 3 節　結婚と別れ

第 4 節　ラティフェ・ハヌン以外の女性たち

第 3 章　結論（P.18）

第 1 節　結論

第 2 節　おわりに

参考文献リスト（P.20）

序章

第1節　はじめに

ムスタファ・ケマル・アタチュルクは“トルコ建国の父”と呼ばれ、第１次世界大戦後のトルコ共和国成立の際に多大な努力をし、様々な功績を挙げている。共和国初代大統領になってからも活躍し、その成果は政治面だけに止まらず、生活や宗教と幅広い。まさに‘アタテュルク’の名にふさわしい人生である。第１世界大戦後、国の存在が無くなってしまうという危機に、国民をひとつにまとめることのできる気迫と指揮力にはただただ敬服するばかりである。ムスタファ・ケマル・アタテュルクは優れた軍人であり、政治家であった。スルタン・カリフ制度の廃止や処刑後の演説の「私がトルコだ！」からはかなり強引なイメージを持ってしまうが、彼が政権を握ってから15年で宗教改革、産業革命そして文化革命を成し遂げたとさえ言われている。

現在でもムスタファ・ケマル・アタテュルクが亡くなった1938年11月10日午前９時５分になるとサイレンが響わたるなか国民は、彼に対して黙祷をささげる。このように彼は半ば“神格化”されている。

第2節　問題提起及び本稿の目標

しかし、どんな英雄と言えども元は同じ人間である。どんな人間であれ「完璧」といえるほどの人間は存在し得ない。なぜ彼は後世においてそこまで「完璧」な男であったのだろうか。それは、彼の死後、２代目大統領イノニュによって規定されたアタチュルク侮辱禁止法によってムスタファ・ケマル・アタチュルクの私生活に関する資料は少なく、彼の存在はピュアなまま残されてきた。第一次世界大戦の際、オスマン帝国のスルタン政府が降伏声明を出したときのムスタファ・ケマル・アタチュルクの様子はこのように書かれている。

―― ケマルは電報を手にしたままひとことも口をきかずに、30分ほど敵陣を睨み続けていたという[1]。

現実にそのような行動を取れないかといえば、不可能ではない。しかしながら少々脚色さ

[1] 大島直政「ケマル・パシャ伝」（新潮選書 1984 年）P120 参照

れている感を覚える。このように脚色された形で彼の行動が記載されていることが少なからずある。

筆者は、ムスタファ・ケマル・アタテュルクの隠されている人間らしい部分はないのであろうかーすなわち、‘一人間’としての部分をどこかで垣間見ることができないかと考えた。

そこで、人間のもっともプライベートな部分の一つである結婚ならびに女性関係に筆者は注目した。‘鉄の男’も一度だけ結婚をしている。この結婚ならびに女性関係を探ることで、ムスタファ・ケマル・アタテュルクのプライベートに関連するエピソードや発言を考察し、ムスタファ・ケマル・アタチュルクの人間味ある部分を少しでも明らかにしようと試みることを本稿の目標とする。

第１章

～ムスタファ・ケマル・アタチュルクの生涯～

第１節　生誕、軍人へ

ムスタファ・ケマル・アタチュルクは1881年サロニカ（現在ギリシアのテッサロニカ）で生まれ、ムスタファと名づけられた。父アリ・ルザは税関の下級役人で母ズベイデは一般的な農民の娘だった。ムスタファは７歳の時に公立小学校に入学したが、授業の大半がコーランの暗記という彼にとってはつまらないもので、次第に授業に反発するようになり学校をやめてしまう。海外事情に触れることが多かった税関役人の父の勧めもあって、ムスタファは西欧流の私立学校に入学した。しかし、父の死をきっかけにこの学校も退学した。その後彼と家族は、母の兄の農場に移り住んだ。

11歳の時にムスタファは再びサロニカで学生生活を送る。しかし彼は１年もたたず母の聖職についてほしいという願いを振り切ってサロニカにある陸軍幼年学校に通い始める。陸軍幼年学校に通い始めたムスタファは、友人たちと論争を繰りひろげてはことごとく論破していった。そのうえ無口で孤独を好む彼は、次第に孤立していった。しかし彼が得意とする数学の先生だけはちがっていた。同じムスタファという名の先生は、彼の才能を見抜いてか‘完全な’を意味する‘ケマル’という第二の名を与えた。こうして彼はムスタファ・ケマルと名乗るようになる。

第２節　第１次世界大戦

17歳で陸軍幼年学校を卒業したムスタファ・ケマルは、マナストゥルの陸軍士官学校、イスタンブールの陸軍高級士官学校を経て、飛び級で陸軍大学への入学が認められた。中尉となった彼は秘密結社の「祖国」に所属し、当時の専制政治を打倒し西欧風の立憲政治の確立を訴え、活動を始めた。しかしこの行動が当時のスルタン、アブデュルハミト２世の秘密警察にばれてしまい、ムスタファ・ケマルを含む秘密結社のメンバーは刑務所に送られてしまった。陸軍大学を監視する役目であったイスマイル・ハク・パシャは自分の身の危険を感じスルタンに必死に訴え、ムスタファ・ケマルたちは処刑を免れた。

1905年に陸軍大学を卒業し大尉となったムスタファ・ケマルは、彼の危険性を熟知していたイスマイル・ハク・パシャによって当時は軍事的にあまり重要視されていなかったダマスクスの騎兵連隊に送られた。面白くない２年間をここで過ごした後、彼は友人フェトヒの勧

めでサロニカ軍団の参謀部への転属願いを出した。サロニカで大掛かりな秘密結社、統一と進歩委員会が結成されつつあることを耳にしたからだった。1907年に転属は実現したが、この秘密結社は彼を失望させた。この組織のリーダーであったエンヴェルを中心に唱えていた汎トゥラニズムの主張はムスタファ・ケマルにとって夢想以外の何物でもなかったからである。こうして２人は衝突するようになり、統一と進歩のための委員会がクーデターを起こし、帝国の実権を握ってからもムスタファ・ケマルはさしたる重要な軍職につくことはなかった。こうした中、1914年６月28日のサラエボ事件をきっかけに第１次世界大戦が始まる。オスマン・トルコという老国が滅亡の道を突き進む中、ムスタファ・ケマルは一躍英雄となっていくのである。

1915年２月に帰国を命ずる電報が届くまではブルガリアの首都ソフィアで駐在武官に留まっていたムスタファ・ケマルであったが、ダーダネルス海峡の防衛を命じられた。現地、ゲリボル半島に到着した彼は、トルコの軍事顧問をしていたドイツ軍人ザンデルス将軍と衝突し、陸相エンヴェルに予備軍的な性格の強い19師団の団長に降格されてしまった。しかしムスタファ・ケマルにとって幸運にも、連合軍が決めた上陸ポイントの１つに19師団が配備されていたのである。上陸の一報を受けると司令部の指示を待たずに連合軍を迎え撃つ決心をし、進攻を防ぎ続けた。彼はいつでも前線で指揮を取り、飛来してきた弾が彼の腕時計を打ち砕いたことがあったとも言われている。こうして兵士の士気を上げ、信頼されるようになっていった。そして1916年12月に連合軍はゲリボル半島から撤退を始めたのである。

この戦いにおける功績が認められパシャ（将軍）に昇格したムスタファ・ケマルであったが、このことをあまりよく思っていなかったエンヴェルによって戦況が苦しい東部戦線へと送られたのだった。しかしすでにこの頃からダーダネルス海峡を死守したとして兵士や市民の間でムスタファ・ケマルの名声は上がりつつあった。

東部戦線の状況は、開戦時から比べてロシア軍に400キロも進攻を許しているという状況で、軍隊も体をなしていない惨状であった。しかしケマル・パシャはここでも兵士の士気を上げることに成功し、軍を立て直し1917年春には国境線を回復するまでに至った。これ以上の功績を重ねてもらっては困るエンヴェルは、彼にまた移動を命じたのである。

今度はシリア戦線へと送り込まれたケマル・パシャは、ここの最高司令官であったドイツ軍人のファルケンハイン将軍と衝突し、ついには司令官の職を解任されてしまった。そんな矢先に彼は病気にかかり、約１年戦線を離れることになるが1918年７月に再びシリア戦線に復帰した。このころにはオスマン軍の敗戦の色は濃くなっており、10月30日に当時のスルタ

ンメフメット６世が自分の財産と地位の保護を条件に独断に近い形で降伏声明を発表した。ドイツも翌11月に降伏し、第１次世界大戦は幕を降ろしたのである。

第３節　祖国解放戦争

帝都イスタンブールにもどったケマル･パシャが目にしたのは敗戦で脱力した民衆と連合国の言いなりになっているスルタン政府の姿であった。ケマル・パシャは政府要人に祖国を救うための方策を必死になって説明して回ったが、受け入れてもらえなかった。しかし大戦以来､彼を信頼してくれた陸軍省次官イスメットや左官であったアリフなどとは秘密裏に会い、国の将来について語り合っていた。

そんな中ケマル・パシャは、スルタンによって未だ連合軍と残存オスマン軍の小競り合いが続いているアナトリアへ派遣された。黒海沿岸のサムスン市に上陸したケマル・パシャ一行は、内陸のアマシアに司令部を密かに設置し、残存トルコ軍や民衆に解放戦争を呼びかけたのである。これにスルタンは激怒し、彼を逮捕する命令を下したのである。しかしここで２つのことがケマル・パシャを有利に立たせた。１つはギリシア軍によるエーゲ海沿岸部への進行である。ギリシア軍の侵略行為は多くのトルコ兵の復員取り下げを招き、各地に抵抗組織が結成されていった。２つ目は1920年連合国から突きつけられたセーブル条約である。トルコ領の大幅な縮小や多額の賠償金などの内容を含んだこの条約を､スルタンは自らの財産や地位の保全のため承諾したのである。この行為に呆れた兵士や民衆が次第にケマル・パシャのもとに集まってきた。この頃、ケマル・パシャを議長とするトルコ大国民議会がアンカラで開催されており、上記の２つの要因で急速に大きくなっていった。こうして祖国解放の戦いは始まったのである。

ダーダネルス海峡の権益を維持したいイギリスの支援があるギリシア軍に対して、ケマル・パシャ率いるトルコ軍は健闘していた。そして1921年８月に天王山とも言うべきサカリア川の戦いが開始される。士気の下がらないトルコ軍とケマル・パシャの作戦が成功したことにより、８月29日にサカリア川の戦いで勝利を収めた。この功績が認められてケマル・パシャはトルコ大国民議会から‘信仰擁護者’を意味する‘ガーズィ’の称号が贈られた。

サカリア川の戦いの勝利でアンカラ政府は国際的に信用されるようになり､フランスと秘密協定を結び、シリア方面に展開していた兵力を自由に使えるようになった上、フランスやイタリアから武器弾薬の購入が可能となった。強化された軍隊で1922年８月26日、ケマル・パシャの「前進せよ。目標は地中海！」の号令とともに総攻撃を開始した。勝負は１日でつ

きギリシア軍は拠点となっていたイズミルへ退却し、そこから本国へと帰っていった。９月９日にトルコ軍はイズミルへ入城したのだった。海峡に残っていたイギリス軍とも一触即発のにらみ合いが続いたが何とかこれは回避され、10月にムダンヤで休戦協定が結ばれた。こうして解放戦争は終了したのである。

第４節　近代化の第一歩

ムダンヤ協定で無効になったセーブル条約に代わる条約調印のためスイスのローザンヌで講和会議が開かれた。しかしここに招待されたのはアンカラ政府と皇帝政府の両者であった。これに対して国民は激怒した。アンカラ政府のもとで苦労して戦い抜き勝利を収めた彼らにとって、もはや皇帝メフメット６世は無用だったのだ。この世論を利用してケマル・パシャは強行策にでる。スルタン（皇帝）・カリフ（教主）制を分離して、スルタンを廃止すべきだと主張し始めるのである。11月３日皇帝制度の廃止は議会の圧倒的多数で可決されたのである。17日にはメフメット６世がイギリスに亡命し、623年に亘るオスマン・トルコ帝国の歴史に終止符が打たれた。

ローザンヌ講和会議にケマル・パシャは腹心であるイスメットを派遣し、1923年７月にローザンヌ条約が結ばれた。そして憲法草案が議会によって承認され、10月29日、ムスタファ・ケマルが初代大統領としてトルコ共和国が誕生した。

トルコの最高権力者の地位を不動のものにしつつあったが、その反面やはり敵も多く存在した。反ケマル派はカリフを君主とするべきと主張を始めるのである。スルタンの廃止とは異なり、国民の生活に根強く浸透している宗教の問題なだけにカリフ制度の廃止は容易ではないことをムスタファ・ケマルは理解していた。彼はその機会をじっくりとうかがっていた。

しかし、その機会は以外にも早く訪れる。当時カリフであったアブデュルメジトがインドのイスラム教の分派であるイスマイル派の首長アガ・カーンが、カリフの威厳を尊重していないムスタファ・ケマルを非難していることを発表した。このことを逆手にムスタファ・ケマルは利用し、インドの背後にはイギリスがついていて、これは彼らの陰謀だと主張したのだ。解放戦争の記憶もまだ新しくイギリスにあまりいい印象をもっていなかった国民は、もはやカリフの言うことに耳をかさなかった。そして1924年３月３日、議会はカリフ制度の廃止を可決し、ムスタファ・ケマルは本格的に民主主義国家建設を開始した。

第５節　本格的な改革、そして死

まず宗教裁判所、宗教省、学校の宗教教育の廃止などを決めた。さらに宗教法を無効とする新たな法律を発布する。この法律に基づいて刑法、民法、そして商法など次々と制定していった。こうして日常生活から宗教法の干渉を排除し、また男女平等など当時の世界ではかなり進んだ法律を制定することに成功した。

このままムスタファ･ケマルが理想とする近代的な民主主義国家建設は進んで行くようにも思えた。しかし、彼の急進的な改革について行けなくなった者たちも存在していた。彼ら反ケマル派はついにはケマル暗殺を計画するまでになってしまう。ムスタファ・ケマルの死で混乱した隙に､クーデターを起こし政権を取った後にカリフを君主とする立憲君主国家をつくることを考えていた。だが、ムスタファ・ケマルはこの計画のことを事前に耳にして、反ケマル派を逮捕して翌月には全員国家反逆罪により処刑したのである。

かつての同士たちを処刑するのは心苦しかった。しかしムスタファ・ケマルは改革の歩みを緩めなかった。処刑実行翌日、彼はこのような演説をおこなっている。

『私は数えきれないほど戦場で死と直面したし、必要とあらば明日にでも再び命を戦場でさらすつもりでいる。だが､それはすべて､祖国を強力な独立国家にしたいがためである。私は、私の生きがいである唯一のもの、すなわちトルコ国民を、進歩に向かって導かねばならない。我が国民が進歩への道をしっかりと、そして方向を間違えることなく歩めるようになった時、私はすべての権力を手放すつもりでいる。だが、我が国民の歩みはまだ始まったばかりなのだ。すなわち、私を殺すことはトルコ国民の未来を奪うことなのだ。もっとはっきり言おう！現在の時点においては、私がトルコだ！』

ムスタファ・ケマルの改革はさらに進んで行った。西洋の度量衡制度や太陽暦の導入、近代的な教育制度の整備、トルコ帽やヴェールなどのイスラム的な服装をやめさせ、さらに女性の参政権を認めた。またローマ字を基調とするトルコ文字をつくった。ムスタファ・ケマルはこのような改革を半ば独裁的に押し進めて行ったのである。

そんなムスタファ･ケマルに議会は‘父なるトルコ人’の意味を持つ‘アタテュルク’という姓を贈っている。この“トルコの父”、ムスタファ・ケマル・アタテュルクの改革の努力が実り、10年後には自前で工業製品をつくり、農業生産も輸出できるほどまでに伸びた。あと10年ぐらいしたら安心して引退できると言っていた矢先に、彼は倒れてしまう。そして1938年11月10日午前９時５分にトルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクはこの世を去ったのである。享年は57歳であった。

第２章

～ムスタファ・ケマル・アタチュルクの女性関係～
- ラティフェ・ハヌンを中心に -

本章では、先行研究であるHalide Edipの著書“The Turkish ordeal; being the further Memoirs of Halilde Edip”[2]とSadi Borakの著書“Ataturk'un Ozel Mektuplari”[3]（サディ・ボラク著『アタチュルクの個人的な手紙』－邦訳・筆者）の‘Ataturk,Latife'la Nasil Evlendi,Nasil Bosandi? ’(「アタチュルク、ラティフェとなぜ結婚し、なぜ別れたのか？」－邦訳・筆者）を参考とし、ムスタファ・ケマル・アタチュルクの女性関係について考察する。なお、両著作の詳細は脚注を参照されたい。

第１節　ラティフェ・ハヌンという女性

本稿の目的がムスタファ・ケマル・アタチュルの人物像を女性関係から考察するということにある以上、生涯で一度の結婚の相手として選んだ女性、ラティフェ・ハヌンは最重要人物である。彼女が一体どのような人物であったのかを探る必要がある。まずは先行研究を参考に適宜引用し、彼女の人物像を検討していく。

―― 彼女がかつて１年間大学の教養課程に在籍しており、そこでわれわれは会ったことがあること、その時若者についての一般的な議論をしていたこと、彼女は最近フランスから帰国したばかりで向こうでは法律の講義に出席していたことを知らされた[4]。

ラティフェ・ハヌンは子供の頃からパリで教育を受けていた。当時、現地のフランス人女性でさえ高校を卒業することはたいへん珍しいことであった。しかし彼女の場合は、高校卒

---

[2] Halide Edip,“The Turkish ordeal; being the further Memoirs of Halilde Edip”（New York, 1928）。本書中の第13章‘In Smyrna’は粕谷元氏により訳されており（粕谷元「スミルナにて」（『トルコ文化研究』6号、1992年））、本稿においては当該訳を参考とした。この資料は以後「スミルナにて」と表記する。なお、粕谷氏は本書のトルコ語版も参照したが、ケマルにとって都合の悪い部分をはじめとして削除・省略があったため、ほとんど参考にならなかったと述べている。

[3] Sadi Borak,“Ataturk'un Ozel Mektuplari”（Kaynak Yayinlari,1998）中の‘Ataturk, Latife'la Nasil Evlendi, Nasil Bosandi?’。尚、この資料は以後「アタチュルクの手紙」と表記する。

[4] 「スミルナにて」P54参照

業だけに止まらず、なんと大学にまで通っていたのである。それがたったの一年間であったにしても、かなりの教養があるインテリ女性であったことはまちがいないであろう。

―― 当時まだ24歳とのことだったが、淑やかなマナーと成熟した物腰のためにもっと年長に見えた。彼女の優美な挨拶は、威厳と旧世界の魅力とを兼ねていた。彼女のどんな動作も、社交界の若い娘の映画スター気取りの身振りを思い起こさせるものではなかった[5]。

‘気取りの身振り’を感じさせないラティフェ・ハヌンは、普段からそのような生活をしていたからだと考えられる。彼女は当時大金持ちであった。ムスタファ・ケマル・アタチュルクが彼女の財産目当てに結婚したのではないかとうわさされてしまうほどであった。そんな環境のなかで育った彼女の振る舞いが自然と‘淑やかに’そして‘優美に’なるのは必然的である。

―― 黒いヴェールの中の顔はとても魅力的で、その小さな身体と同様に丸くてぽっちゃりしていた。あまり女性的ではないが、固く結ばれた薄い口は並々ならぬ力と意思の強さを示していた。目はとりわけ美しく、威厳があり、輝いていて、知性に溢れていた。私は今でもその色を思い出すことができる。魅力的で茶色と灰色の混ざった好奇心をそそる輝きできらめく色を[6]。

当時のトルコでは、どんな身分であろうと10代の内に結婚していないと「家にとどまった娘」と呼ばれてしまうほどであった[7]。ムスタファ・ケマル・アタチュルクと結婚した時ラティフェ・ハヌンは24歳であった。これほど容姿端麗な女性が、当時のトルコで24歳まで未婚であり続けたのはインテリであったがためではなかろうか。しかしムスタファ・ケマル・アタチュルク同様、彼女について詳しく語られていないため断言はできない。

以上ラティフェ・ハヌンの人物像を見てきたが、彼女とムスタファ・ケマル・アタチュル

---

5 「スミルナにて」P56 参照
6 「スミルナにて」P56 参照
7 大島前掲書 P168 参照

クの出会いはどのようなものであったのか。次に同様の方法で彼らの出会いを考察する。

第２節　ラティフェ・ハヌンとの出会い

ムスタファ・ケマル・アタチュルクほど地位と名声がある男は、いろいろな女性と出会う機会は多かったに違いない。そのうちのひとつがこのラティフェ・ハヌンとの出会いだったのである。ここでは２人が出会った直後の記述を引用し、考察する。

―― ムスタファ・ケマル・パシャが私に耳打ちをした。「彼女は首にロケットを掛けていたんだが、その中に僕の写真を入れていたぞ。彼女は僕のところに来て、そのロケットを見せてこう言ったんだ。“ お気に触れましたか。いけないことでしょうか ”」。彼はうれしそうに含み笑いをした[8]。

「スミルナにて」の作者ハリデ・エディブは、ムスタファ・ケマル・パシャの写真をロケットに入れておくことは、たとえ恋愛感情がなくても、当時のトルコ人女性であれば誰にでもありえると書き加えている[9]。それは現在トルコにおける彼のある種 ‘ 神格化 ’ されている状況から考えても、想像に難くない。ましてや解放戦争直後のこの場面ならば、なおさらのことである。故にラティフェ・ハヌンが初めからムスタファ・ケマル・パシャに対して恋愛感情をもって接していたかは疑問であるが、含み笑いをしたムスタファ・ケマル・パシャは満更でもなかったような印象を受けた。

―― ラティフェ・ハヌンは、スミルナの勝利を祝うべく、イスメット・パシャ、新聞記者たち、そして私を自宅に招待した。ムスタファ・ケマル・パシャが車で送ってくれたが、スミルナ市内を通り抜ける間、彼はラティフェ・ハヌンについて実にうれしそうに語った。彼女がいかに教養があり、良いマナーを身に付けているか、父親が今回の火事で財産の大半を失ったにもかかわらず、それを気にしない彼女がいかに愛国心に満ちているか[10]。

---

8 「スミルナにて」P54 参照
9 「スミルナにて」P54 参照
10 「スミルナにて」P56 参照

ラティフェ・ハヌンがムスタファ・ケマル・パシャ一行を招待したこの日は1922年９月18日であったと記されている。９日にイズミル（スミルナ）に入城を果たして間もないこの日に、このような話をしている。ギリシア軍をイズミルから追い出し、解放戦争は幕を閉じたにせよ、目前に待ち構えているイギリスとの講和会議や、トルコという国の未来など悩みは尽きないはずである。そんな中である女性について話しているところをみると、ムスタファ・ケマル・パシャはラティフェ・ハヌンに対してたいへん好印象をもっていたように思える。

２人の初対面の様子は以上のようなのもであったと考えた。ここではムスタファ・ケマル・パシャの人物像に触れるような記述は特に見当たらなかった。次は彼がラティフェ・ハヌンとの結婚を決意する場面を考察する。

第３節　結婚と別れ

ここでは「アタチュルクの手紙」を引用し、ムスタファ・ケマル・パシャとラティフェ・ハヌンの結婚に至るまでの経緯と、別れを考察する。この文献は筆者が調べた限りでは日本語に訳されていないため紹介も兼ねて、途中省略も含むが、多目に引用している。

引用した部分は「アタチュルクの手紙」（p288～293）はサリフ・ボゾクという人物が語っている。まず初めに彼を簡単に紹介しておく。

サリフ・ボゾクは1881年サロニカで生まれた。ムスタファ・ケマル・アタチュルクと同じ時期、同じ町に生まれ、同じ学校でも学び、初めから運命の糸で結ばれているようなものだった。ムスタファ・ケマル・アタチュルクが解放戦争を始めるためアナトリアへ行く前とシリア戦線にいるときは第一補佐官としてそばについていた。また共和国成立前後は政府要人としてアンカラへ行った。ムスタファ・ケマル・アタチュルクが議長を勤めていた時も側近としてつかえていた。後に彼は国会議員にも選ばれ、1939年の選挙まで毎回当選していた。この間はムスタファ・ケマル・アタチュルクが公務の時の周辺警備もしていた。しかしムスタファ・ケマル・アタチュルクの死とともに彼の時代も終わり、体調を崩しヤロバに身を引き1941年に死去している。

ラティフェ・ハヌンはサリフ・ボゾクを“第二の父”と呼び、たいへん慕っていたようだ。ムスタファ・ケマル・アタチュルクとの関係についての悩みを相談している。

以下この悩み等について「アタチュルクの手紙」から必要と思われる部分を引用する。

(以下、「アタチュルクの手紙」（P288～293）の引用)

イズミルからアンカラへ帰ってきた後、ムスタファ・ケマル・パシャはだいたい毎晩ラティフェ・ハヌンを話題にし、彼女を長々と褒めた。ムスタファ・ケマル・パシャがたいへんな病気にかかった母に、ラティフェ・ハヌンについて褒めたことを聞かせると自分で見てみたい、そして息子がもらってほしいと思うようになった。医者たちは病気をアンカラで治療できないであろう、絶対に沿岸に住むことが必要であることを言うと、イズミルへ行く決定を与えた。

ある晩、パシャは私に命じた：

“医者たちが診たところ母をイズミルで治療するために、そこへ連れて行く必要がある。したがって、君は明日ここから自動車でコンヤへ、そこから電車でイズミルへ出発してくれ。イズミルで知事と会い、母が居住できる適当な家を見つけて、家具を整えた後に私に知らせなさい。”

（中略）

ラティフェ・ハヌンは私を通りの門で出迎えて、私に対して大きな心づかいを見せた。具合はいかがか尋ねられた後、イズミルへどのように来たのか尋ねられた。

（中略）

ラティフェ・ハヌンとともに、アブドゥルハリク・ベイ（知事）と会うため役所に行った。

ラティフェ・ハヌンはカルシュヤカに療養所のような別荘があって、この別荘にはだれも住んでいないことを言い、この別荘がパシャの母が住む保障ができることを知らせた。そして知事とともに私たちをそこへ連れていった。

（中略）

ムスタファ・ケマルから前向きな返答をもらってからラティフェ・ハヌンと毎日ギョズテペの家からカルシュヤカに行って、家の飾り付けと家具を整えることに忙しくした。

（中略）

イズミルに居た期間、ムスタファ・ケマルから受けた命令は一週間に何回かの暗号電報で、私はムスタファ・ケマルに手紙でラティフェ・ハヌンについての情報を与えた。なぜならムスタファ・ケマルが彼女と結婚することを私は望んでいたいからだ。与えた

情報はすべてラティフェ・ハヌンが有利になる情報であった。

ラティフェ・ハヌンは私がムスタファ・ケマルへ書いた手紙の一箇所を読んだ。これが理由で私を父のように身近に受け入れた。

ムスタファ・ケマルがラティフェ・ハヌンと結婚することをイスメット・パシャも望んでいた。ムスタファ・ケマルがラティフェ・ハヌンと結婚するつもりでいたことを知るまでは、この問題に早く結論がでることを待っていた。

ムスタファ・ケマルが結婚すれば、昔のように毎晩飲まず、もっと規則的な生活が送れるだろう、健康を維持していけると思っていた。

ムスタファ・ケマルがラティフェ・ハヌンと結婚することにただ１人、フェトヒ・パシャは適していると見ていなかった。どのようにしてラティフェ・ハヌンがムスタファ・ケマルとつりあう女性であり続けるのかと言われた。このテーマに、あいにくフェトヒ・パシャの考えと発言が正しいと出た。

ムスタファ・ケマルの母が旅路に出たことを知らせる情報を待っている間アンカラからこのような電報が届いた：

“母が病気で震えている。行動できない状態にある。したがって、そこに残した部隊とともにアンカラへ帰れ。”

ムスタファ・ケマルのこの電報に皆悲しんだ。

（中略）

ラティフェ・ハヌンはこのように言った：

“はい。しかしここに残された部隊もアンカラへ戻るよう命じられた、ムスタファ・ケマルの家族と関係が切れることの証拠である。”

私は反論して：

“あなたの考えに賛同できない。しかしアンカラへ行って、すべての望みがもたらされるよう努力するので信頼してください。ムスタファ・ケマルと会ってから後のことをありのままあなたに書きましょう。その時あなたの考えがどこまで誤っていたかを理解するだろう。だから今からあまり心配にとりつかれるのは正しくない。”

ラティフェ・ハヌンは私に感謝の返答をした。しかし不安は全然治まっていなかった。

（中略）

私はアンカラに戻り、そしてムスタファ・ケマルに報告した。

ムスタファ・ケマルはラティフェ・ハヌンを気がかりの、そして心配の状態に残さな

いために戦場で乗っていたサカルヤという名の馬といくつかのブリキ缶の蜂蜜をプレゼントに、自分の護衛から３人の兵士でもってイズミルへ送った。私もラティフェ・ハヌンを喜ばせたくてある形で手紙を書き、送るよう命じた。兵士たちがプレゼントとともに出発してから数日後、夜中に家で寝ていると電話が鳴って起きた。

電話に出ると、ムスタファ・ケマルの声と直面した。

“サリフ、寝ていたかい？”と尋ねて

“今から家に来い。”と言って命令した。

すぐに家に行った。ムスタファ・ケマルはこのように言った：

“母はきっとイズミルに行きたいだろう。どの医者もどうすると聞いている。死ぬのならイズミルで死のうと言って、ベッドから立ち、シーツさえもかぶった。すぐにイズミルへ行こうと言っている。最後に望むところに連れて行くよう命令を与えた。電車の準備が整っている。おまえもその準備をして、母とともにイズミルへ行ってくれ。

（中略）

電車はカルシュヤカ駅に着いて、ラティフェ・ハヌンが駅で待っているのを見つけた。私はムスタファ・ケマルの母を紹介した。母にラティフェ・ハヌンを紹介した後、病人をコンパートメントからおろして、はじめから準備されていた別荘に行った。別荘は駅から近かった。

アンカラからともに来ていた医者と妻と私以外では、ラティフェ・ハヌンが別荘に病人のそばに泊まっていた。死ぬまでそばを離れず病人を、つきそいに看護婦よりも多くの注意と関心で面倒をみていた。

ムスタファ・ケマルに、毎晩電報で母の病気にについて情報を与えていた時、ラティフェ・ハヌンの病人にしている看護も知らせた。一ヵ月後病人は死去した。

ムスタファ・ケマルは母の死をエスキシェヒールで知った。

その晩に出発して、エスキシェヒールに我々が来たことで本人に知らされた。

エスキシェヒールからイズミルに来られた時、我々はカルシュヤカで出迎えた。私をコンパートメントに１人呼んでこのように命令した：

“私はラティフェ・ハヌンと結婚することを決めた。今、父親にこのことを自分で伝えたい、それと誰にもこのことは言うなと付け加えておく。”

(以上、引用終了)

こうして1923年１月に２人は結婚する。‘ 母の死 ’ が結婚を決定づけたと言っても過言ではない。ムスタファ・ケマル・パシャは、自分の母親を誰よりも近くで、そして誰よりも関心を持って看病してくれているひたむきな態度に感動していたにちがいない。しかしこの出来事で一気にラティフェ・ハヌンに好意を持ったとは考えにくい。第２節で述べたように、もともと好印象を持っていたと思われる。またここでは彼女が不安にならないように、共に戦場を駆け巡っていた馬をプレゼントしている。この行為はよほどのことに思える。

イギリスとのムダンヤ休戦協定を結んだ頃、ムスタファ・ケマル・パシャがラティフェ・ハヌンに「私の夢は一つ現実のものとなった。そしてもう一つの夢（結婚－筆者）も近く現実のものになるだろう。」[11]という内容の手紙を送ったとされているが、残念ながら引用した章では見つけることはできなかった。むしろムスタファ・ケマル・パシャ自身が書いた手紙は一通だけで、イスメットに送った離婚を決意した内容のものであった。

他の手紙はラティフェ・ハヌンがサリフ・ボゾク宛に、ムスタファ・ケマル・パシャの健康を心配しているものや、自分存在が忘れられてしまうのではないかといった相談事を送っているものであった。と言うのも、ムスタファ・ケマル・パシャは「手紙は必要ない。電報で十分。」と言い放っているからだ。

別れのことに関してもあまり詳しく書かれてなく、ムスタファ・ケマル・パシャの生活のテンポの早さについていけなかったと記述されている。そして1925年８月に２人は離婚した。

第４節　ラティフェ・ハヌン以外の女性たち

結婚の面からでさえ、ムスタファ・ケマル・パシャの人物像はなかなかうかがい知ることができない。そこで本章で使用した２つの主な文献でラティフェ・ハヌン以外の女性にも注目して考察してみる。

―― 心の中で、私はムスタファ・ケマル・パシャの審美眼を賞賛していた。今まで彼の恋愛のことには関心がなかったが、彼が心から愛したただ二人の女性、フィクリーエ・ハヌムとラーティフェ・ハヌム（ラティフェ・ハヌンのこと－括弧書き・筆者）は、非常に目立った人物だった。私はフィクリーエ・ハヌムがかわいそうでならなかった。パシャの新たな恋のことを耳にしたら、彼女が深く悲しむだろうことがわかっていたか

[11] 大島前掲書 P168 参照

らだ[12]。

続けて次の引用文を載せる。

―― 生涯を見たときに、陸軍幼年学校の学生時代から始まったムスタファ・ケマルの生活はたくさんの娘や女性が入れ替わった。ムジガン、ナデレ、ファニ、リザ、マリア、コリン、ルトゥフィエ、プリンセス・ミュニベとメブヒベ、ゼフラとフィクリエ…

これらの内、愛が報われなかったため、頭を銃で打ち抜き自殺したフィクリエと自身を電車から投げたゼフラとニビレのように泣く泣く命を絶った者もいる[13]。

「アタチュルクの手紙」の引用文に出てくる女性の名前の列をみるからに、ムスタファ・ケマル・パシャの女性関係は派手であったと言わざるを得ない。

しかしさらに注目すべき点は「スミルナにて」の引用文に登場するラティフェ・ハヌンとは異なるもう一人の女性、フィクリーエ・ハヌム。そして「アタチュルクの手紙」の引用文に登場するフィクリエは、同じ女性であると考えられることである。恋の勝負に負けたフィクリーエ・ハヌムは銃で自分の頭を打抜き、自殺してしまったのだろうか。

---

12 「スミルナにて」P57 参照
13 「アタチュルクの手紙」P357 参照

第３章　結論

第１節　結論

本稿でムスタファ・ケマル・アタテュルクの究極のプライベートである女性関係、特に唯一結婚したラティフェ・ハヌンとの結婚に関連するエピソードを探りながら、彼の半ば‘神格化’された人物像を少しでも剥がしてみたいと考えた。

２人の結婚とムスタファ・ケマル・アタテュルクの母の死との関係は筆者にとっては新しい知識であった。しかし第２章、第４節で明らかにした女性の存在（特にフィクリーエ・ハヌム）には驚かされた。ムスタファ・ケマル・アタテュルクに愛人が何人もいたのは結構知られているが、愛が報われず、命をおとした女性がいたとは思いも寄らなかった。

調べた限りでも３人の女性が自殺しているし、ラティフェ・ハヌンとの結婚もうまくいかなかったムスタファ・ケマル・アタテュルクは、器用に女性と付き合えたわけではないということが言えるのではなかろうか。彼は軍事的、政治的には優秀な男であったが一方で、ラティフェ・ハヌンとの結婚の結果が示していた通り、夫や父親としての才能ももちあわせていたとは思えない。

共和国２代目大統領イノニュが定めたアタチュルク侮辱禁止法の影響は、かなり大きいことをつけ加えなければならない。「アタチュルクの手紙」でも彼の言葉は少なく、他の人の会話や手紙が主に占めていた。

繰り返しとなるが、本文中でもケマル・パシャがいかに優れた政治家・軍人であったかは十分に述べたつもりであるし、それを否定する気は筆者にもない。

しかしながら、彼の人物像についての事実を隠していくことは、果たして我々のような外国人だけでなく、後世のトルコ人にとって“真のトルコ”を知るという点で、かえって阻害となるのではないだろうか。

第２節　終わりに

普段から、私は“研究”ということについて敬遠し、通常の授業のレポートを書くこともあまり好きではなかった。

しかし、今回、自分が興味を持っている“ケマル・パシャ”という人物を、しかも、そのプライベートな部分を、決して得意とはいえないトルコ語を読み、調べ、研究することについて、面白さを感じることができた。

この感覚を感じることができただけでも、卒業論文を書いた意義があると私は考えている。そして、レポートを書くことが苦手な私が卒業論文を書いたという自信が今後の人生に役立つであろうとも感ずる。

しかし、このような思いを抱くことができたのは、新井政美教授が間違っても優等生とはいえない私を最後まで見捨てずに、指導していただいた点によるところが大きい。

この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

＜参考文献リスト＞

新井政美 2001：『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』みすず書房

大島直政 1980：『ケマル・パシャ伝』 新潮選書

粕谷元 1992：「スミルナにて」『トルコ文化研究』6号 トルコ文化研究編

Sadi Borak.1998：“Ataturk'un Ozel Mektuplari”,Kaynak Yayinlari

（参考URL）http://www.kimkimdir.gen.dr